

巨大縦隔線維脂肪腫の1例

山口 文雄¹⁾ 吉村 一彦¹⁾ 川口 哲男¹⁾
望月 一郎¹⁾ 半田健次郎¹⁾ 草間 昌三¹⁾
津金 次郎²⁾ 志田 寛²⁾ 丸山 雄造³⁾

1) 信州大学医学部第1内科学教室

2) 信州大学医学部第2外科学教室

3) 信州大学附属病院中央検査部

A CASE OF GIANT FIBROLIPOMA OF THE MEDIASTINUM

Fumio YAMAGUCHI¹⁾, Kazuhiko YOSHIMURA¹⁾, Tetsuo KAWAGUCHI¹⁾,
Ichiro MOCHIZUKI¹⁾, Kenjiro HANDA¹⁾, Shozo KUSAMA¹⁾,
Jiro TSUGANE²⁾, Hiroshi SHIDA²⁾ and Yuzo MARUYAMA³⁾

1) Department of Internal Medicine, Shinshu University School of Medicine

2) Department of Surgery, Shinshu University School of Medicine

3) Central Clinical Laboratories, Shinshu University Hospital

YAMAGUCHI, F., YOSHIMURA, K., KAWAGUCHI, T., MOCHIZUKI, I., HANDA, K., KUSAMA, S., TSUGANE, J., SHIDA, H. and MARUYAMA, Y. *A case of giant fibrolipoma of the mediastinum.* Shinshu Med. J., 29 : 555-562, 1981

A 57 year-old male was admitted on Feb. 23, 1980, complaining of cough, purulent sputa and left chest pain, and suspected of primary lung cancer by sputum cytology and aspiration lung biopsy prior to admission.

On admission, the chest X-ray films showed a well-circumscribed large mass shadow located in the middle and lower portion of the left anterior lung field. The findings of sputum cytology, bronchography, endoscopy, chest CT and percutaneous tumor biopsy were suggestive of mesenchymal tumor (fibrolipoma) originated of the left pleura.

It was confirmed that the tumor was originated of the anterior mediastinum by the thoracotomy and the fibrolipoma histologically by the postoperative examination. The tumor was 20×10×10cm in size and 1,860g in weight.

(Received for publication May 11, 1981)

Key words ; 線維脂肪腫 (fibrolipoma)

縦隔腫瘍 (mediastinal tumor)

I 結 言

Schulumberger はその著 Atlas of tumor pathology¹⁾ の縦隔腫瘍の項で、脂肪腫の同意語として線維脂肪腫をあげており、それはよく被包化され、時に分葉傾向を示し、左右いずれかの胸腔内にまで拡がって巨大化することがあると記述している。今回、喀痰細胞診より肺癌が疑われたが諸検査の結果、間葉性腫瘍と術前診断し手術の結果、巨大な縦隔線維脂肪腫であった 1 治験例を報告する。

II 症 例

症例：57才，男。

主訴：咳嗽，喀痰，左前胸部痛。

家族歴：特記すべきことなし。

既往歴：41才時に胃潰瘍で胃切除術を受けた。53才時に左前胸部を打撲したことがある。

現病歴：昭和52年頃より感冒に罹患すると咳嗽，喀痰などの症状が長引くようになった。昭和54年12月初旬，咳嗽，膿性痰，左前胸部痛があり，改善しないために12月20日某医受診し，胸部X線写真（写真1）で左中下肺野を占める腫瘤状陰影を指摘され，市立大町総合病院を受診，12月22日入院した。喀痰細胞診で，Class V，adenocarcinoma，経皮吸引細胞診の結果も Class IV であったため肺原発の腺癌と考えられた。しかし当科外来における気管支鏡検査では左 B₃ 変形，

左 B_{4,5} B₆ および下気管支幹の圧排狭窄の所見があり，気管支鏡下擦過細胞診で悪性細胞はみられず，気管支造影所見（写真2，3）にても，腫瘍が左上下葉間に発育侵入した状態で各気管支を圧排しているのみであった。

精査の目的で昭和55年2月23日当科に入院した。

入院時所見：体格やや大，栄養中等，脈拍64，整，血圧104/70mmHg，結膜に黄疸，貧血はなかった。胸部の所見では，左第3肋間以下打診上濁音を呈し，呼吸音聴取せず，背部では肺底部打診上短でその上部に鼓音帯を認めた。胸部X線正面像では心陰影に接して左中下肺野は腫瘤影で占められ，側面像（写真4）で左胸水の貯留を認めた。入院時検査成績は表1に示すごとく，糞尿，末梢血に異常なく，血液化学では GOT の軽度上昇を認める以外異常なく，肺機能では % VC 67.4% と軽度の拘束性障害，血液ガス分析で PaO₂ 71.7mmHg と軽度の低酸素血症を認めた。胸腔穿刺の結果，胸水は黄色透明，蛋白量 3.0g/dl，リバルタ反応陰性，細胞診では，組織球，リンパ球，中皮細胞がみられたのみであった。赤沈は1時間値 8 mm，血清検査では異常を認めなかった。

入院後経過：発熱，咳嗽，喀痰などの症状はほとんど消失し，わずかに左前胸部に圧迫感を訴えるのみで全身状態も良好であった。胸部のコンピューター断層図（CT）検査では，左肺で心陰影に接し，境界が比較的明瞭なことより被膜を有すると考えられる腫瘤が，前

表1 入院時検査成績

糞尿：異常なし		呼吸機能：	
末梢血：		%VC	67.4%
赤血球数	381×10 ⁴ /mm ³	FEV 1.0%	73.7%
白血球数	3,400/mm ³	血液ガス分析：	
ヘマトクリット	37.1%	pH	7.402
血液化学：		PaO ₂	71.7mmHg
BUN	12mg/dl	PaCO ₂	38.2mmHg
Creatinine	1.1mg/dl	O ₂ 飽和度	92.8%
Na	143mEq/l	胸水：	
K	4.4mEq/l	リバルタ反応	陰性
Cl	108mEq/l	蛋白濃度	3.0g/dl
Al-Pase	61IU	CEA	1.0ng/ml以下
GOT	43KU	細胞診	Class I
GPT	35KU	赤沈：	8 mm（1時間値）
総コレステロール	110mg/dl	CRP：	（-）
トリグリセライド	47mg/dl		
LDH	156IU		

縦隔線維脂肪腫

表2 良性縦隔間葉性腫瘍の本邦報告例 (1971年~1980年)

症例	報告者	年度	年齢	性	部 位	大きさ (cm)	重さ (g)	診 断 名	文献
1	原田ら	1972	43	♂	左縦隔		223	嚢状リンパ管腫	9
2	今泉	1973	1	♀	後縦隔 ~ 脊椎管	3.5×3.0×1.0 (胸腔) 9.0×2.8×1.5 (脊髄)		脂肪腫	10
3	水野ら	1973	9	♂	上縦隔	11×6.5×6.5	350	脂肪腫	11
4	山岡ら	1973	21	♂	中縦隔	9×6×3	120	線維腫	12
5	古賀ら	1973	38	♀	上縦隔	5×4.5×3.5	52	血管線維腫	13
6	春日ら	1974	7	♀	上縦隔 ~ 左胸腔	球状直径 5		脂肪腫	14
7	春日ら	1974	46	♀	前縦隔 ~ 右胸腔	15×6×3		脂肪腫	14
8	春日ら	1974	48	♀	前縦隔 ~ 右胸腔	鶏卵大		脂肪腫	14
9	倉田ら	1975	1	♂	縦 隔 ~ 頸 部			脂肪腫	15
10	笛木ら	1975	34	♀		小児頭大		嚢腫性リンパ管腫	16
11	榛沢ら	1975	64	♂		20×21×15	3,100	線維筋腫	17
12	土井	1975	60	♀	前縦隔	手拳大		脂肪腫	18
13	葉山と 安田	1976	6	♀	上中縦隔			脂肪腫	19
14	生駒ら	1976	5		上縦隔	鶏卵大		脂肪腫	20
15	勝田ら	1977	81	♂		5×7×3		血管外皮腫	21
16	土屋ら	1977	42	♀	後縦隔	16×14×20 8×7×10	1,600 120	平滑筋腫	22
17	山際ら	1978	72	♂	後上縦隔	3.5×3.5×3		血管腫	23
18	横沢ら	1978	74	♂	後縦隔	22×20×11	1,450	脂肪腫	24
19	谷岡ら	1978	59	♂	前縦隔			脂肪腫	25
20	中村ら	1978	34	♂	前縦隔	4×3×1.5		粘液線維腫	26
21	金子ら	1978	1	♀	縦 隔 ~ 頸 部			リンパ管腫	27
22	飯田ら	1978	7	♀	上縦隔	超鶏卵大		リンパ管腫	28
23	松島ら	1979	56	♀	前縦隔			脂肪腫	7
24	松島ら	1979	60	♀	前縦隔			脂肪腫	7
25	斉藤ら	1979	36	♀	上縦隔	鶏卵大		毛細血管性血管腫	29
26	菊地ら	1979	44	♂	中上縦隔			リンパ管腫 (?)	30
27	池内ら	1979	72	♂		7.6×5.9		リンパ管腫	31
28	高田ら	1979	46	♂	前縦隔	小児手拳大		良性間葉腫 (Stout)	32
29	小林ら	1980	48	♀	前縦隔	25×15×10	1,220	脂肪腫	33
30	小林ら	1980	38	♀	前縦隔	10×10×5 2×4×2.5 3×3×6	500	リンパ管腫	33
31	自験例	1980		♂	前縦隔 ~ 左胸腔	20×10×10	1,860	線維脂肪腫	

および左側胸壁に接しており、背部にわずかに肺実質があり、腫瘍内は濃淡混在し分葉構造がうかがわれ、その density の高い部位の EMI number は+80であった (写真5)。Ga シンチでは左中下肺野に軽度の集積を認めたのみであった。その後の喀痰細胞診では悪性所見なく、シルバーマン針による経皮腫瘍生検所見では良性の線維性組織および脂肪組織片が得られ

たのみであった。その後2回の生検でも同様の所見があり、間葉性腫瘍 (線維脂肪腫) が疑われ (写真6)、その起源として胸膜、胸壁あるいは縦隔などが考えられたが、腫瘍が左上下葉間に入り込む形で発育している点を考慮して胸膜由来と推定した。入院後も腫瘍の増大傾向がみられるために本学第二外科で腫瘍摘出術を行った。

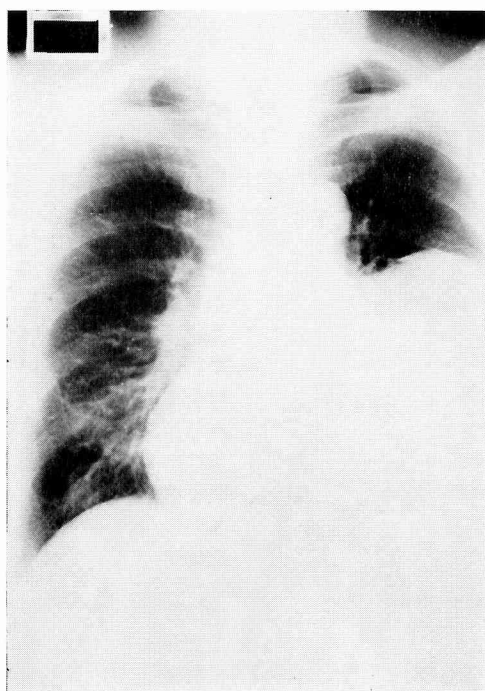


写真1 胸部X線写真正面像

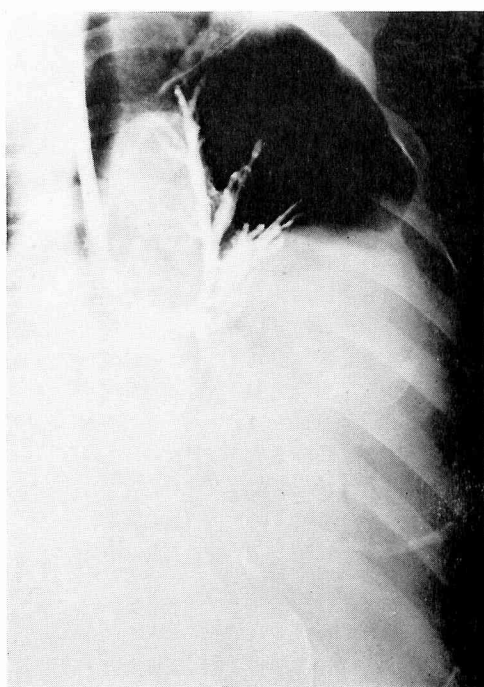


写真2 左気管支造影正面像

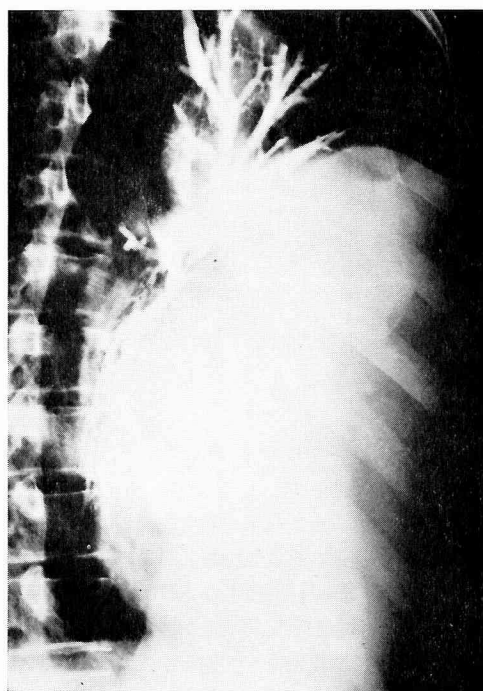


写真3 左気管支造影側面像

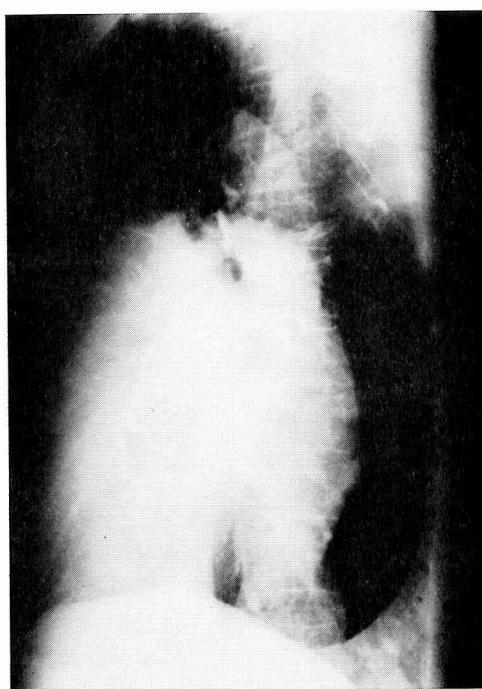


写真4 胸部X線写真左側面像

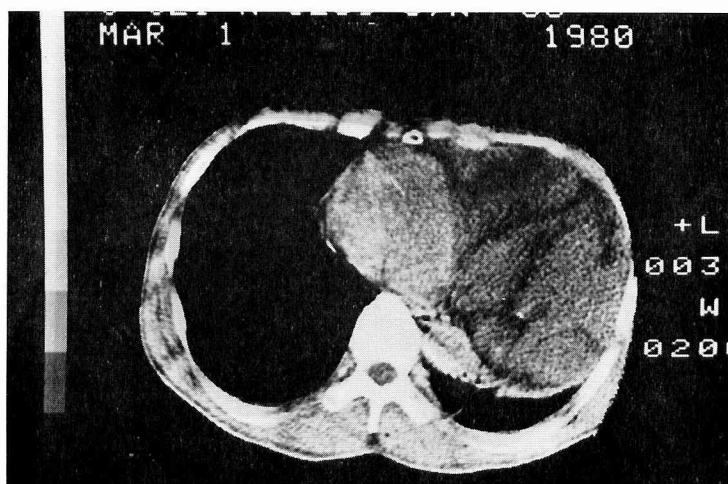


写真5 胸部 CT 像

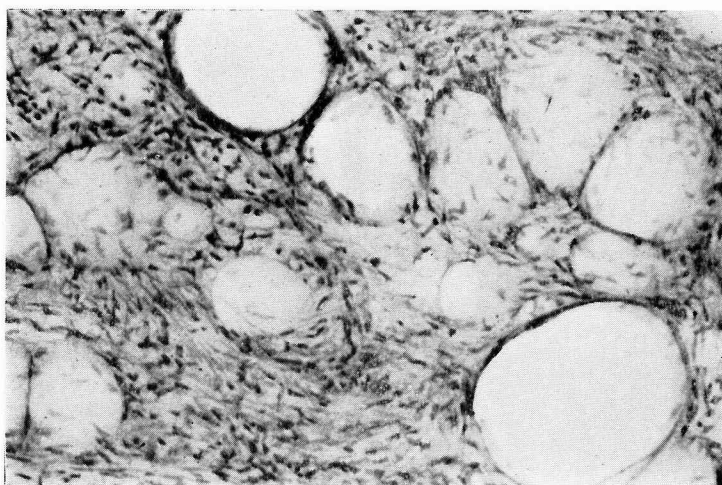


写真6 経皮腫瘍生検組織像
(H-E 染色 $\times 100$)



写真7 摘出腫瘍標本

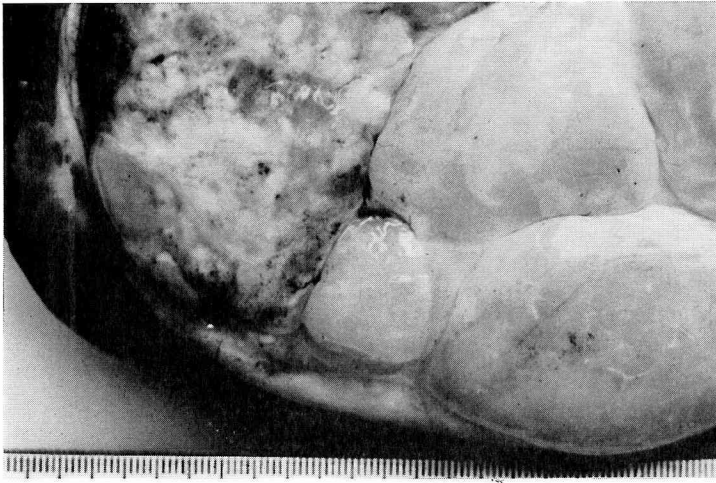


写真8 摘出標本剖面

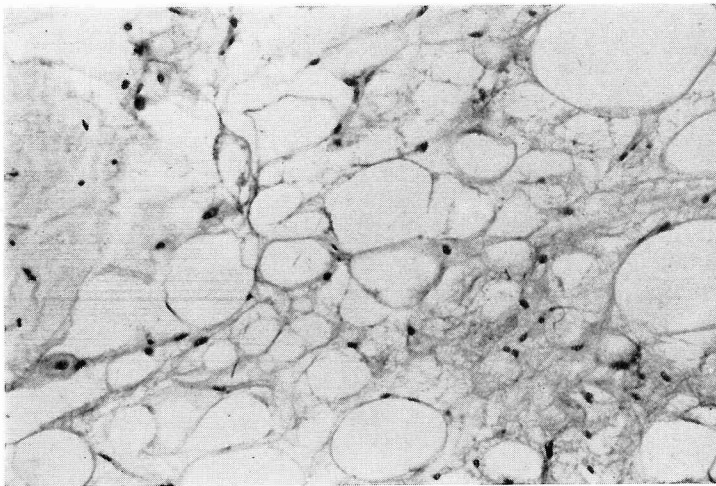


写真9 病理所見
(H-E染色×100)
脂肪成分の多い部分

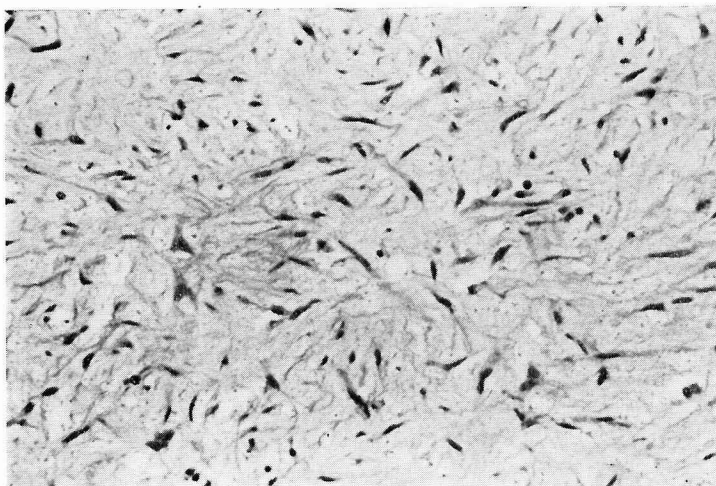


写真10 病理所見
(H-E 染色×100)
線維成分の多い部分

開胸の結果、腫瘍は前縦隔より発生したもので、重量1,860g、大きさは20×10×10cmで表面平滑、被膜でおおわれ、その一部に胸膜が付着していた(写真7)。剖面では結合織で分葉された黄色の脂肪性および白色の線維性と思われる組織の混在を示していた(写真8)。H-E染色標本でも、成熟した脂肪細胞と疎な線維性成分を含み未分化な間葉織よりなる良性腫瘍であった(写真9, 10)。

III 考 察

Lyons ら²⁾の報告では縦隔腫瘍782例中5例(0.6%)で、また寺松ら³⁾の報告では1,485例中19例(1.3%)が mesenchymal tumor である。1971年から1980年までの良性縦隔間葉性腫瘍の本邦報告例は調べ得た範囲では表2に示すごとく自験例を含め31例であった。

Fraser と Paré⁴⁾によると縦隔脂肪腫は縦隔のどの部位からも発生しうるが前縦隔に比較的多く、そのほとんどが良性であるという。本例は喀痰細胞診で腺癌が疑われ経皮吸引細胞診でも Class IV であったため肺原発の腺癌が考えられたが、自覚症状および検査所見より良性腫瘍と診断した。すなわち、肺の感染が消失すると咳嗽、喀痰などの症状が軽減したこと、気管支造影で各気管支が腫瘍により圧排された所見のみであり、腫瘍が左上下葉間に発育侵入した状態で存在しており、これは悪性腫瘍よりは良性腫瘍を示唆する所見と考えられた。シルバーマン針による3回の経皮腫瘍生検の結果はいずれも、脂肪組織、線維組織として一部に上皮性の成分を思わせる部分を示す所見であり、悪性像はまったくなかった。また、腫瘍の胸腔内

の占拠部位ならびに胸膜原発でも巨大な線維腫の報告例⁵⁾⁶⁾もあるので、胸膜由来の間葉性腫瘍を疑った。

胸部 CT では腫瘤陰影内に濃淡がみられ分葉傾向が推測された。松島ら⁷⁾は縦隔脂肪腫の胸部X線像の特徴として、腫瘤陰影の淡さと胸腔造影で示される腫瘤辺縁の分葉像を挙げているが、本例ではCT像より腫瘤の分葉構造の存在や、また腫瘍が被包化されていることも推測された。Mendez ら⁸⁾は胸腔内の脂肪組織の EMI number は -55~-10 と報告しており、本例の腫瘤部分の EMI number は +80 であり、この所見からは脂肪成分のみまたは特に脂肪成分が豊富な腫瘍は一応否定された。摘出標本の病理検査の結果より、本例では脂肪組織と線維組織が種々の割合で混在していることが示され、これは本例の EMI number が +80 を示した CT 所見を裏付ける所見と考えられる。

IV 結 語

咳嗽、膿性痰および左胸痛を訴え、胸部X線写真上左中下肺野の巨大腫瘤影を示し、喀痰細胞診で肺癌が疑われて当科に入院。喀痰細胞診、気管支造影、内視鏡および胸部 CT 検査さらに3回にわたる経皮腫瘍生検などの所見によって、胸膜由来の間葉性腫瘍が推定された。摘出術により大きさ20×10×10cm、重さ1,860gの巨大な前縦隔由来の線維脂肪腫と病理組織学的に確認された1例について報告した。

本論文の要旨は昭和55年10月4日、第67回日本内科学会信越地方会において発表した。

文 献

- 1) Schulumberger, H.G. : "Atlas of Tumor Pathology", Section V, Fascicle 18, p.36, Armed Forces Institute of Pathology, Washington, D.C., 1951
- 2) Lyons, H.A., Calvy, G.L. and Sammons, B.P. : The diagnosis and classification of mediastinal masses. 1. A study of 782 cases. Ann Intern Med, 51 : 897-932, 1959
- 3) 寺松 孝, 山本博昭, 伊藤之彦 : 縦隔腫瘍に関する全国集計. 日胸外会誌, 24 : 264-269, 1976
- 4) Fraser, R.G. and Paré, J.A.P. : "The Diagnosis of Diseases of the Chest", pp. 1827-1830, Saunders, Philadelphia, 1979
- 5) 大久保史明, 松金秀暢, 長屋和治, 白石幸明 : 胸腔内巨大線維腫の1例. 日胸外会誌, 20 : 859, 1972
- 6) 小竹 寛, 浜崎尚文, 安東良博, 下山晶士, 真柴裕人, 生駒義人, 中村和夫, 黒谷明嗣 : 巨大胸膜腫瘍の1例. 日内会誌, 68 : 1479, 1979
- 7) 松島敏春, 中嶋健博, 藤井芳郎, 原 義人, 栗田 啓 : 縦隔脂肪腫の胸部X線像の特徴. 日胸臨, 38 : 617-621, 1979
- 8) Mendez, G.Jr., Isikoff, M.B., Isikoff, S.K. and Sinner, W.N. : Fatty tumors of the thorax demonstrated by CT. Am J Roentgenol, 133 : 207-212, 1979

- 9) 原田邦彦, 渡辺恒明, 斉藤勝彦: 縦隔嚢状リンパ管腫の1例. 日外会誌, 73: 859, 1972
- 10) 今泉了彦: 珍しいリボーム-砂時計型縦隔脂肪腫. 外科診療, 15: 565, 1973
- 11) 水野種一, 岡田雅之, 青木弘興, 片田憲治: 胸腔内脂肪腫の1例. 外科, 35: 191-193, 1973
- 12) 山岡慶之, 竹原 平, 桜井武雄, 長束皓司, 西村 治, 太田久雄, 田上 豊, 滝本幹之, 得津修一, 星野英明, 前田瑞雄, 児玉 憲, 岡田浪速: 著明な気道閉塞を呈した縦隔線維腫の1例. 和歌山医学, 24: 47-51, 1973
- 13) 古賀昭夫, 中村 敬, 山田晃久, 吉田 裕: 縦隔血管線維腫の1治験例. 胸部外科, 26: 331-334, 1973
- 14) 春日秀樹, 土屋喜哉, 寺門広輝, 吉野重利, 小林和男, 吉川英雄, 塚本 順, 清水一雄: 縦隔脂肪腫の3治験例. 日臨外会誌, 37: 258-263, 1974
- 15) 倉田昌彦, 田辺広己, 本田 稔, 三谷大洋, 青柳 一, 甲 利幸, 大矢尚文, 大橋 真: 縦隔, 頸部の巨大脂肪腫の1治験例. 日胸外会誌, 23: 330, 1975
- 16) 笹木和彦ほか: 縦隔洞嚢腫性リンパ管腫の1例. 日胸疾会誌, 13: 188, 1975
- 17) 榛沢 進, 佐生 隆, 工藤英俊, 清水一夫, 鈴木隆三, 石川創二, 桑原紀之, 斉木茂樹: 低血糖発作を伴った巨大縦隔腫瘍の1例. 日内会誌, 64: 826, 1975
- 18) 土井 修: 今日の症例. 臨放, 20: 439-440, 1975
- 19) 葉山正陽, 安田 正: 縦隔脂肪腫の1例. 日小会誌, 80: 706, 1976
- 20) 生駒静正, 安藤良輝, 山家 武: 右腕頭静脈を圍繞せる縦隔脂肪腫の1例. 日胸疾会誌, 14: 753, 1976
- 21) 勝田宏重, 坂東義清, 茂幾俊武, 中路忠司, 伊東政春: 縦隔血管外皮腫の1例. 日胸外会誌, 25: 1376, 1977
- 22) 土屋和之, 野村繁雄, 田中蔵郎, 横山 敏, 淡河秀光, 佐藤博正: 巨大な縦隔平滑筋腫の1手術治験例. 手術, 31: 661-664, 1977
- 23) 山際裕史, 竹内藤吉, 岡村義弘, 多田弘一, 中村 卓, 前田 誠: 後縦隔に生じた血管腫の1例. 手術, 32: 451-453, 1978
- 24) 横沢忠夫, 寺島雅範, 吉川時弘, 江口昭二: 巨大な縦隔脂肪腫の1手術例. 日胸疾会誌, 16: 227, 1978
- 25) 谷岡恒雄ほか: 縦隔脂肪腫の1例. 日胸外会誌, 26: 1320, 1978
- 26) 中村 隆, 吉川 厚, 秋凡琥甫, 大場英己, 野中達也, 馬越正通, 庄司 祐: 縦隔に生じた粘液線維腫の1例. 日胸外会誌, 26: 901, 1978
- 27) 金子道夫, 仁科孝子, 間 浩明, 河原崎秀雄, 平田彰業, 横森欣司, 本名敏郎, 土田嘉昭, 斉藤純夫: 呼吸困難・顔面浮腫を伴った頸部縦隔リンパ管腫の1例. 日小外会誌, 14: 161, 1978
- 28) 飯田秀治, 高橋秀世, 横山 宏, 大川治夫, 川村 健, 小林厚夫, 堀江 宏, 永井米次郎, 飯野正敏, 山森秀夫, 荻部喜一, 坂庭 操, 田辺政裕: 右上縦隔内嚢腫性リンパ管腫の一治験例. 日小外会誌, 14: 161-162, 1978
- 29) 斉藤俊博, 小島誠一, 大内将弘, 佐治公明: 胸水を伴った縦隔血管腫の1例. 日胸外会誌, 27: 133, 1979
- 30) 菊地弘毅, 中橋 勝, 平賀洋明, 渋谷雄也: 自然消失した縦隔リンパ管腫と思われる1例. 日胸疾会誌, 17: 816, 1979
- 31) 池内広重, 吉田弘一, 押部光正, 町田哲太, 星 暁夫, 高橋通宏, 浅井隆志, 浅井龍彦: 縦隔洞リンパ管腫の1例. 日胸外会誌, 27: 240, 1979
- 32) 高田善介, 横地 貢, 林 勝彦, 西村欣也, 後藤和夫, 小川 昌, 岸川基明: 前縦隔に発生した mesenchymoma の1例. 日内会誌, 68: 1156, 1979
- 33) 小林 稔, 入沢敬夫, 中村千春, 井桐幹夫, 広田雅行, 高野邦夫, 佐藤 徹, 今井高二, 鷲尾正彦, 山本和夫, 高橋敬治, 寺嶋一夫: まれな縦隔腫瘍の2治験例. 胸部外科, 33: 388-392, 1980

(56.5.11 受稿)